

京都に居住して御醫者並に遇せられたのは御醫者並の初である。御醫者の座列は、御醫者(本道をいふ)・御外科・御鍼立・御口科の順序で、同業者中では知行の順序に因つた。

オイタテバ 御鑄立場 白山の大汝岳の南麓にある小岡。昔藤原秀衡の金銅佛像を嶺上の社に籠めた時、こゝにて鑄立てたといふ傳説がある。

オイデマツリ 御出祭 ↓ヘイコクサイ 平國祭。

オイノツギキ 老繼木 二冊。淺野栗齋の撰で、文久二壬戌年秋八月の自序がある。諸書の抜書、その他聞書、自己の考説等を載せる。又老繼木次策二冊があり、前書の續編で、明治六癸酉春季春日の自序がある。著者栗齋は藩士淺野政周である。

オイノナグサミ 老の慰 一冊。慶長九年小瀬甫庵道喜が書いた隨筆。小人のこと、婦人のことなどを擧げて問答駢にこれを論じてある。

オイノミチクサ 老の路種 上田耕の著。著者が能越の地に流浪中、物を觀、事に感じたことに就いて記した短編百七十條を集めたもので、主として藩の政治經濟に關する意見を述べ、龍野子の名を以てした著者の序文が添へられてゐる。跋文は羽倉簡堂で、丁巳とあるのは安政四年である。

オイワケ 老分 白山尾添口登路の地。泰澄記に、毎年山開に里人競うて登山するが、老齡險路に堪へぬ者は檜新宮に至つて嶺上を拜し、こゝより戻るから老分の名があるとす。蓋し追分の義であらう。

オウカクジ 應覺寺 鳳至郡江崎に在つて、

眞宗東派に屬する。

オウカンノナミマツ 往還の並松 加賀藩改作方覺書に、『往還並松慶長六年に爲御植被爲成候由。』とあつて、上口は金澤の町端から松任まで三里、下口は町端から津幡まで三里の間に初めて並松を植えた。武江年表には慶長九年二月東海道及び越後・陸奥の諸道に松を植えしめたとあるが、加賀藩のは是と別で、前田利長の計畫したことと見える。

オウゲン 應玄 ↓レンシヨウ 蓮照。
オウゲンジ 應現寺 河北郡木津に在つて、眞宗東派に屬する。

オウゲンジ 往還寺 金澤野町に在つて、眞宗東派に屬する。
オウゲンジ 往還寺 珠洲郡鶴岡に在つて、眞宗東派に屬する。

オウコ 往古 ウゴ 鳳至郡小間生の内の小屋。
オウコオハヤシ 往古御林 ↓カマドメオハヤシ 兼留御林。

オウゴノミヤジンジャ 擁護宮神社 能美郡今江に在つた。式内等舊社記に、『擁護宮神社。今江村鎮座、今稱春日明神。一宮・石宮・野宮・早松等末社數社。』と記し、又寶永誌に、『同村の内おこしの宮と云社有。又をいふともあり。神舂春日の由。』とあり、寶永誌異本には大河宮とする。明治の後春日社と稱したが、同十二年九月今江春日神社と改めた。

オウジュンギヨウネン 應進行然 行然は俗諺を詳かにせぬ。賀州の人。年十七郡の覺然に就いて削髮出家した。聖一國師の禪を普門寺に唱へた時、應進往きて掛錫し、ほゞ解する所あり、文永の初舊里に歸つて天道山無量壽福寺を興し、弘安三年五月廿八日寂した。今鳳至郡門前の酒井氏藏寫經胎記の奥書に、『建長六年十二月廿八日以御本南無阿彌奉寫之早、行然十七』とあるものはこれであらう。

オウシヨウジ 應照寺 金澤安江町に在つて、眞宗東派に屬する。初め羽咋郡正友村に在つたが、享和中今の地に移つた。
オウダイセキネンキ 王代積年記 二冊。九里正長著。貞享二年功成つて之を前田綱紀に呈し、古瀬戸茶入を拜賜した。普く歴史を繙閱し、帝王・將軍・諸侯・名士の出處・履歴を抄録したもので、後に木下順庵・五十川剛伯の序跋を附した。

オウチ 邑智 羽咋郡の古邑名。大永六年十月一宮社務職年貢米錢納帳に、『志雄・羽喰・吉野屋・邑智分』とあつて、田島の作人が記されてゐる。又同帳に、『社務外山分八段八在邑智』ともある。故にこの邑智は一村の名であらう。後世邑智淵を千路淵ともいふから、邑智村は即ち千路村であるまいかといはれる。
オウチン 邑智院 羽咋郡に在つた。和名抄に邑智郷といふもの即ち是である。承久三年注進の能登國田數目録に、『包智院、貳拾町五段二、承久元年檢立定。同庄内、公文職壹町、承久二年檢立定。蓮池左近將監。』とある包智院は邑智院の誤寫である。この邑智院は一宮藥師院應永廿八年・明應八年等の文書にも見え、後世亦邑智院の名を存した。

うち邑智院と單釋するものには、千代町・中川・野・柳田・一宮・一宮寺家・浦・飯山・垣内田・上江・圓井・吉崎・深江・數野・千石・走入・清水・原・見砂・菅池・千路・白瀬・神子原・福水・四町の廿四村があつた。

オウチガタ 邑智淵 鹿島・羽咋二郡の間に跨る湖沼である。千路淵とも菱湖ともいふ。長さ五八〇米、幅一四一八米、周圍一三軒七、面積七八七ヘクタール。濁川・久江川・飯山川等の水を容れ、湖脚現に羽咋川となつて海に入る。邑智淵の面積が往時廣大であつたことは、道與准后がその回國雜記に、『藤井といへる所は、浦ぢかき里なりければ、波を見てよめる。』といつた地が、今は湖畔から三〇〇米を離れてゐるのでもわかる。越登賀三州志故墟考にも、『今枝直方自書の略志に、云々。四十餘年前能登一覽の時、久江・小金森・高島・小田中邊、右の淵縁を埋出して僅かに田にしたるが、此七八年前再覽するに、飯山の下までも新田となり、湖中甚だ狭まれば、是にて思ふに、今の新田を古への湖水と見れば事分る也。』とある如く、邑智淵の縮少は頗る著しいものであつた。今この湖畔には、羽咋郡羽咋・柳田・深江・吉崎・圓井・千田・尾崎・志々見・堀替新・本郷・千路、鹿島郡酒井・四柳・大野・鹿島路・金丸・金丸出、合計十七部落がある。

オウチガタチコウタイ 邑智淵地溝帯 七尾灣頭から羽咋に至る長さ二四軒幅四軒の陥没を邑智淵地溝帯と稱する。この地溝帯の北方には正片麻岩の露出があり、南方には準片麻岩の露出があつて、縁邊はこれ等の碎片から成る第三紀層で蔽はれるから、その形成せ

る所あり、文永の初舊里に歸つて天道山無量